

# 小学校社会科において児童の地域への関心を高める 地域素材の活用方法

## －第3学年『農家の仕事』の実践を通して－

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 初等教科教育分野 沼尾優稀

### 1. 問題の所在

今日の小学校社会科における地域学習は、主に市の様子について扱う第3学年と、県の様子について扱う第4学年を中心として行われることが多く、平成29年告示『小学校学習指導要領解説社会科編』においては、第3・4学年の学習を通して、「地域社会に対する誇りと愛情」「地域社会の一員としての自覚」を育むことが目標に据えられている。しかしながら、現在の小学校社会科における地域学習では、前述の「地域社会に対する誇りと愛情」「地域社会の一員としての自覚」の基盤となる、児童の地域に対する関心を高めるような学習が十分になされていないと考える。以下にそのように考える要因を2点指摘する。

#### (1) 児童の地域に対する関心の低下

平成31年度から令和4年度までの全国学力・学習状況調査報告書によると、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることができますか」という質問に対し、肯定的な回答（「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」）をした児童の割合（山梨県内の公立小学校）は、平成31年度が62.6%であったのに対し、令和4年度では54.5%にまで低下している。同様に、「今住んでいる地域の行事に参加していますか」という質問に対して、肯定的な回答をした児童の割合は、平成31年度が79.7%であったのに対し、令和4年度では62.2%にまで低下している。以上の調査結果より、山梨県内の公立小学校に在籍する児童の地域に対する関心は、年々低下している傾向にあると考えられる。

#### (2) 中学年社会科における教材の問題点

中学年の社会科で使用される教材としては、主に教科書と市区町村ごとに発行される副読本が挙げられる。しかしながら、社会科の検定教科書は、全国各地の小学校に在籍する児童を対象として作成される。よって、教科書の紙面で取り上げられる社会的事象は、ある特定の地域の事象が取り上げられるため、教科書を中心とした学習では、児童の題材に対する興味関心を喚起することが難しい。

また、身近な地域を学習対象とする第3学年の社会科では、市区町村ごとに発行されている副読本を使用するケースが多い。しかしながら、市区町村の社会的事象が扱われるものの、やはり学習者の生活圏に存在する社会的事象が扱われるとは限らない。

以上の2点より、小学校社会科の学習を通して、地域に対する関心を高めるためには、現在使用されている教科書や副読本のみの学習では不十分であり、児童の身近な地域に存在する地域素材を活用した社会科の授業を構想することが重要となる。

### 2. 本研究に関連する先行研究の状況

地域素材の教材化をテーマとする先行研究は数多く存在するが、その多くは学習内容の理解を促すことを目的としたものであり、児童の地域に対する関心を高めることを目的とする研究は少ない。また、その対象も小学校高学年や中学生であり、小学校中学年を対象とした実践は極めて少ない現状がある。

松永（2003）は、地域素材を活用した教材の開発を通して、郷土に対する誇りと愛情を持ち、進んで社会に関わろうとする子どもの育成を目的とした実践を、小学校第3学年を対象として行っている。実践の結果として、地域素材を活用したことにより、自ら解決したいと思うような学習課題を設定することができ、郷土のために進んで社会に関わろうとする態度の育成に繋がったことが示唆されたとしている。

一安（2003）は、児童にとって切実感のある地域素材の教材化を通して、問題解決型の単元計画を工夫することで、社会の一員としての自覚や郷土を愛する心を育むことを目的とした実践を、小学校第4学年を対象として行っている。実践の結果として、児童は自分たちの地域を改めて見つめ直し、地域の課題に真剣に向き合う態度の育成に繋がったことが示唆されている。

しかしながら、どちらの先行研究も、教師の発問や教材に対する児童の反応、授業の様子に基づく分析に留まっており、地域素材を活用したことの効果についての具体的な検証は実施されていない。よって、第3学年を対象とする本研究において、どのような地域素材を活用するのか、望ましい活用方法とは何かという点に加え、実践後の児童の地域に対する関心の高まりはみられるかという点について検証する。

### 3. 研究の目的とリサーチクエスチョン

本研究の目的は、小学校社会科において、地域素材を活用した社会科授業を実践することを通して得たデータを用いながら、以下のリサーチクエスチョンを検証することである。

- ① 児童の地域に対する興味関心の高まりは、本実践によって生じるのか？
- ② 地域に対する関心の高まりがみられた場合、それはどのような地域素材の活用方法や指導方法によるものであるのか？
- ③ 地域素材の抱える課題について、児童が明確な根拠に基づいて、自分の考えを表現することができているか？

### 4. 本研究で選択した地域素材について

本研究では、地域素材として、山梨県山梨市の加納岩地区を中心に生産されている「加納岩白桃」という品種の白桃を選択した。

#### (1) 加納岩白桃とは何か

加納岩白桃とは、山梨県山梨市のブランド品であり、昭和58（1983）年に品種登録されて以来、約40年にわたり作り続けられている白桃の一種である。山梨県が全体の約7割のシェアを占めているが、他にも岡山県や香川県などで生産されている。また、その優れた食味と独特的の栽培方法が評価され、第1回全国果樹技術・経営コンクールにおいて、農林水産大臣賞を受賞している。しかしながら、他の品種の桃に比べ、柔らかく熟しやすいという特徴をもつ加納岩白桃は、近年の高温化の影響を受け、生産が困難になりつつあり、山梨県内における加納岩白桃の出荷量、生産する農家の数は年々減少しているという課題を抱えている。それに伴い、加納岩白桃を生産する農家も、地域のブランド品である加納岩白桃を今後も作り続けるか否か苦悩している現状がある。

#### (2) 加納岩白桃を選択した理由

第3学年「農家の仕事」の小単元では、生産に携わっている人々の仕事の様子について調べることを通して、生産の仕事が地域の人々の生活と密接な関わりをもって行われていることを理解することが目標となる。よって当単元では、各学校の位置する地域で盛んな農業生産に従事する人々の仕事の様子について学習するケースが多い。本研究の対象となる学校が位置する地域は、全国的な桃の生産地であり、児童にとって桃は非常に身近な存在である。しかしながら、実際に地域の桃農家の仕事の様子や、生産活動に対する想いや願いについて触れる機会は少ない。よって、地域のブランド品である加納岩白桃を取り上げることで、児童の興味関心を引き出すことが可能になるとを考えた。加えて、加納岩白桃の生産における農家の苦悩を提示し、地域の農家の立場に立って考え方を表現する学習を取り入れることにより、児童の地域に対する関心を高めることに繋がると考えた。

## 5. 加納岩白桃の教材化と活用方法

本研究では、児童の地域に対する関心を高めることを目的として、加納岩白桃を生産する農家への取材動画、加納岩白桃を生産する農家が抱えるジレンマを扱った追究課題という2つの教材を開発した。以下に、それぞれの教材の概要を示す。

### (1) 加納岩白桃を生産する農家への取材動画

実践を行う小学校の学区において、加納岩白桃を生産する農家の方へ、加納岩白桃の概要や、加納岩白桃の生産における工夫や努力、加納岩白桃の生産が困難になりつつあるという現状への想いなどについてインタビューを実施し、その様子を編集した取材動画を作成した。動画は2種類作成し、1つ目の動画では、取材させていただいた農家の方の仕事内容と生産の様子に加え、加納岩白桃とはどのような桃なのか、加納岩白桃はなぜ全国的に人気が高いのかといった点についてのインタビューの様子を取り上げた。2つ目の動画では、美味しい桃を生産するための工夫や努力、加納岩白桃の生産が困難になりつつある現状に対する想いなどについてのインタビューの様子を取り上げた。

### (2) 農家のジレンマを扱った追究課題

近年の高温化の影響を受け、生産が困難になりつつある加納岩白桃を、今後も作り続けるか否かという農家が抱えるジレンマを、「あなたが桃農家であるならば、今後も加納岩白桃を作り続けるか、または作りやすい新たな品種の桃を作るか?」という問い合わせの形式で児童に提示した。学校周辺の地域の桃農家は、生産が難しく、費用が嵩む加納岩白桃の生産からは徐々に撤退しており、取材を実施した農家の方も、高温下でも比較的作りやすい新たな品種の桃の生産へと移行しているという。地域で古くから作り続けられてきた品種であり、地域のブランド品として人気を博している加納岩白桃を、今後も生産し続けるか、または現在の環境下でも比較的作りやすい新たな品種の桃へと移行するのか、農家が抱えるジレンマ的な課題を追究課題として、地域に対する関心を高めることを目的に児童へ提示した。

## 6. 実践の概要と状況

### (1) 対象校

山梨県公立小学校

### (2) 対象児童

第3学年児童 18名

### (3) 授業実践単元

小单元「農家の仕事」全2時間

### (4) 第1時間目

#### ①目標

山梨市のブランド品である「加納岩白桃」がどのような桃であるのかについて調べることを通して、加納岩白桃を生産する農家の仕事について関心を持つことができる。

#### ②展開

時	・主な学習活動と内容	○留意点【教材】
導入	1. 加納岩白桃の加工品（ジェラート）の写真を見る •写真から、加納岩白桃という品種の桃があることを知る。 2. めあてを確認する	<b>【教材】</b> ジェラートの写真  加納岩白桃とは、どのような桃なのか調べよう。
展開	4. 加納岩白桃について知る •加納岩地区で約40年間作り続けられていることを知る。 5. 生産地を地図で調べる T「加納岩白桃はどこで作られていると思いますか？」 C「加納岩地区や山梨県かな」 •地図から生産地を読み取る C「全国で生産されている」 T「なぜ加納岩白桃は全国で生産されるほど人気なのか？」 6. 取材動画を視聴して調べる •地域の農家への取材動画を視聴し、加納岩白桃が人気である理由について捉える。	○加納岩白桃が誕生した背景を説明する。 ○生産地を予想するように促す。 <b>【教材】</b> 生産地を示す地図 <b>【教材】</b> 地域の農家の方への取材動画① ○他の品種に比べ、食味が優れていることを知る。
終結	7. 調べたことをまとめ	加納岩白桃は… 全国各地で作られていて、人気のある桃である。

## (5) 第2時間目

## ①目標

加納岩白桃が他の品種に比べて高価な理由について考えることを通して、加納岩白桃を生産する農家の工夫や努力、想いや願いについて捉えることができる。

## ②展開

	・主な学習活動と内容	○留意点【教材】
導入	1. 加納岩白桃と日川白鳳の価格を比較する C「加納岩白桃の方が高い」 2. めあてを確認する	<b>【教材】</b> 加納岩白桃と日川白鳳の値札
	加納岩白桃の値段が高い理由を考えよう。	
展開	3. 高価な理由を予想する T「なぜ価格が高いのだろう?」 C「人気だから」「美味しいから」 4. 取材動画を視聴して調べる ・仕事の工夫や努力、加納岩白桃を作ることが難しい理由について捉える。 5. 調べたことをまとめる ・人気であることに加え、高温化によりロスが多く出てしまうことに気づく。 6. 追究課題について考える	○周囲の児童と話し合う時間を設ける。 <b>【教材】</b> 地域の農家の方への取材動画② ○加納岩白桃を生産する農家が減少していることを説明する。
	あなたが桃農家であるならば、今後も加納岩白桃を作り続けるか、または作りやすい新たな品種の桃を作るか?	
	・「今後も加納岩白桃を作り続ける」立場と、「新しい種類の桃を作る」立場に分かれ、意見を共有する。	○一方に意見が集約された場合は、搖さぶる発問を行う。
終結	7. 学習をまとめ  加納岩白桃の値段が高い理由は・・・ 作ることが難しく、様々な工夫が必要であるから。	• 学習感想を記入する。

## 7. 調査方法とデータの分析方法

リサーチクエスチョンの検証のため、以下の3つの調査を実施した。

## (1) アンケート調査

授業実践後、対象の児童に対して、四件法(そう思う・少しそう思う・あまりそう思わない・そう思わない)に基づくアンケート調査を実施した。3つの質問項目では、加納岩白桃という地域素材に対する児童の受け止め、取材動画を視聴したことに対する受け止め、授業を通しての地域学習への意欲の高まりという点について検証することを目的としている。

表1. アンケート項目の内容

項目	内容
Q1	加納岩白桃のような、自分の住む地域にあるものを使った学習をまたしてみたいと思いますか?
Q2	農家の方への取材動画を見たことは、「農家の仕事」の学習の役に立ったと思いますか?
Q3	「農家の仕事」の学習をしてみて、桃農家の仕事についてもっと知りたいと思うようになりましたか?

## (2) 学習感想への自由記述

2時間目の終結部において、農家の仕事の学習を終えての学習感想を児童に自由に記述してもらった。児童の記述内容より、地域に対する関心の高まりと、高まった要因について分析することを目的としている。

## (3) 追究課題への自由記述

2時間目に児童へ提示した「あなたが桃農家であるならば、今後も加納岩白桃を作り続けるか、または作りやすい新たな品種の桃を作るか?」という追究課題について、実践終了後に再度自分自身の考えを記述する時間を設けた。児童には、「1. 加納岩白桃を作り続ける」または「2. 他の種類の桃を作る」を選択させ、その理由を自由に記述してもらった。その記述内容より、地域の農家が抱える課題に対し、明確な根拠に基づいた考えが表現されていれば、本実践を通して、地域に対する関心を持つことに繋がったことが示唆されると想定した。

## 8. 結果

実施した3つの調査における児童の回答状況及び記述内容を示す。

### (1) アンケート調査

**Q1** 「加納岩白桃のような、自分の住む地域にあるものを使った学習をまたしてみたいと思いますか?」という質問に対しては、「そう思う」と回答した児童が16名、「少しそう思う」と回答した児童が2名であった。

**Q2** 「農家の方への取材動画を見たことは、『農家の仕事』の学習の役に立ったと思いますか?」という質問に対しては、「そう思う」と回答した児童が17名、「少しそう思う」と回答した児童が1名であった。

**Q3** 「『農家の仕事』の学習をしてみて、桃農家の仕事についてもっと知りたいと思うようになりましたか?」という質問に対しては、「そう思う」と回答した児童が16名、「少しそう思う」と回答した児童が2名であった。

アンケート調査の結果より、3つの質問項目全てにおいて、「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した児童はみられなかった。

### (2) 学習感想への自由記述

得られた児童18名の学習感想を分析したところ、大きく「地域素材の活用」に関する記述と、「学習意欲の高まり」がみられる記述に分類することができた。一部の児童の記述内容を抽出し、まとめたものである。

表2. 児童の学習感想の記述内容

分類	記述内容
地域素材の活用に関する記述	加納岩白桃のことは全然知らなかったけど、質問まで行ってくれて、すごく加納岩白桃について知れたと思いました。値段のことも質問に行ってくれて、他のことも聞いてくれてよく分かりました。
	農家の仕事の授業が楽しかったし、加納岩白桃のこともいっぱい知れて楽しかったし、そして先生が作った動画も、凄く農家さんに聞いてて、桃のことが分かつてよかったです。
	農家さんは、いろいろな工夫をしているんだなあと思ったし、加納岩白桃のことが分かった。

学習意欲の高まりがみられる記述	桃以外にも、他の山梨県で有名なフルーツのことについて勉強してみたい。 桃の農家さんだけじゃなくて、もっと色々な農家さんのこともたくさん知りたいと思った。 加納岩白桃以外の桃を知りたい。桃農家だけじゃなくて、他の農家のことも知りたい。 もっとしてみたい学習は、ぶどうのことを調べたいです。
-----------------	--

※下線部は各分類の根拠となる記述部分

### (3) 追究課題への自由記述

始めに、回答した児童18名が選択した項目を分析したところ、「1. 加納岩白桃を作り続ける」を選択した児童は8名、「2. 新しい種類の桃を作る」を選択した児童は10名という結果になった。表4は、それぞれの選択項目において、明確な根拠に基づいた考えを表現していた児童の記述内容をまとめたものである。

表3. 追究課題に対する児童の記述

項目	記述内容
① 加納岩白桃を作り続ける	この地域の桃なので、辞めちゃうとその桃が作られなくて、全国の人が悲しくなるからです。
	作るのが難しいけど、人気だし美味しいからずっと作り続けたいです。
	他の種類の桃を作ったら、加納岩白桃がなくなるかもしれないし、私は最後まで加納岩白桃を作り続けたいからです。
	せっかく加納岩で見つかったんだから、もっと作りたい。
② 他の種類の桃を作る	加納岩白桃を作り続けたいけど、作りにくくてあまり作れないし、たくさん作らないとお金が入ってこなくて家のことが大変になるから、違う種類の桃をいっぱい作る。
	他の種類の桃を作ったら、人気になって、いっぱい売れるかもしれないから。
	授業の時は作り続けたいと思ったけど、動画で作り続けるのは難しいと言っていたので、他の種類も桃を作りたいと思いました。

※下線部は選択の根拠となる記述部分

## 9. 考察

調査結果及び分析結果より、本研究において設定した3つのリサーチクエスチョンに対する検証結果について考察する。

### (1) リサーチクエスチョン①

RQ1「児童の地域に対する関心の高まりは、本実践によって生じるのか？」の検証結果としては、本実践によって、児童の地域に対する関心は高まったと考えられる。

その根拠としては、アンケート調査の「加納岩白桃のような、自分の住む地域にあるものを使った学習をまたしてみたいと思いますか？」、

『農家の仕事』の学習をしてみて、桃農家の仕事についてもっと知りたいと思うようになりましたか？」という質問項目に対し、肯定的な回答（そう思う・少しそう思う）をした児童の割合が高かったことに加え、児童の学習感想の記述内容では、「他の山梨県で有名なフルーツのことについて勉強してみたい」、「桃の農家さんだけじゃなくて、もっと色々な農家さんのこともたくさん知りたいと思った」といった、さらなる地域学習への意欲の高まりを示す記述内容がみられたことも挙げられる。

### (2) リサーチクエスチョン②

RQ2「地域に対する関心の高まりがみられた場合、それはどのような地域素材の活用方法や指導方法によるものであるのか？」の検証結果としては、実践の1時間目及び2時間目で活用した地域の農家の方への取材動画を視聴したことが、児童の地域に対する関心を高めることに貢献したと推察される。

その根拠としては、アンケート調査の「農家の方への取材動画を見たことは、「農家の仕事」の学習の役に立ったと思いますか？」という質問項目に対し、肯定的な回答をした児童の割合が高かったことに加え、児童の学習感想の記述内容において、「先生が質問まで行ってくれて、すごく加納岩白桃について知れたと思いました」、「先生が作った動画も、凄く農家さんに聞いて、桃のことが分かってよかったです」など、取材動画を視聴したことについて触れた記述内容がみられたことが挙げられる。

### (3) リサーチクエスチョン③

RQ3「地域素材の抱える課題について、児童が明確な根拠に基づいて、自分の考えを表現することができているか？」の検証結果としては、2時間目で提示した追究課題に対して、児童が地域の農家の立場に立って、今後の加納岩白桃生産への考えを表現することができていたと考えられる。

その根拠としては、追究課題への自由記述において、「①加納岩白桃を作り続ける」と回答した児童の記述内容において、「この地域の桃なので、辞めちゃうとその桃が作られなくて、全国の人が悲しくなるからです」、「他の種類の桃を作ったら、加納岩白桃がなくなるかもしれないし、私は最後まで加納岩白桃を作り続けたいからです」など、加納岩白桃という身近な地域に存在する特産品に価値を見出している回答がみられたことが挙げられる。一方で、「②ほかの種類の桃を作る」と回答した児童は、「授業の時は作り続けたいと思ったけど、動画で作り続けるのは難しいと言っていたので、他の種類も桃を作りたいと思いました」、「加納岩白桃を作り続けたいけど、作りにくくてあまり作れないし、たくさん作らないとお金が入ってこなくて家のことが大変になるから、違う種類の桃をいっぱい作る」、「他の種類の桃を作ったら、人気になって、いっぱい売れるかもしれないから」のように、取材動画の視聴を通して、地域の農家が抱えるジレンマ的な課題に触れ、現実的な視点から今後の加納岩白桃の生産についての考えを表現していると推察される。

2時間目の展開部において提示した追究課題であるが、授業内において、「なぜ農家さんは人気のある加納岩白桃の生産を最後まで続けるのだろう？」という搖さぶる発問を行ったこと、次いで、授業内ののみの検討にとどまらず、授業終了後に再度追究課題への考えを自由に記述させたことによって、加納岩白桃を作り続ける立場と、他の種類の桃を作る立場に意見が分かれ、様々な視点から考えを表現させることができたと推察される。

## 10. おわりに

本稿では、小学校社会科における児童の地域に対する関心を高めることを目的とした地域素材の活用方法について、小学校第3学年での実践とその結果の分析をもとに明らかにしてきた。本研究を通しての成果と課題について検討するとともに、学校現場への示唆を述べる。

### (1) 本研究の成果と課題

まず、本研究の成果を2点挙げる。1点目は、加納岩白桃という新たな地域素材を発見し、教材化を実現した点である。単に、地域のブランド品として人気が高いという側面だけではなく、生産が困難になりつつあるという地域素材の抱える課題にも焦点を当てた教材を開発することができたことは、大きな成果といえる。

2点目は、その教材を活用した社会科の授業実践を通して、児童の地域に対する関心の高まりを検証した点である。教科書で扱われている事象よりも、より児童に身近な事象を扱ったことが、児童の地域に対する関心の高まりに貢献したと推察される。

一方、本研究における課題としては、児童の関心が農家の仕事や加納岩白桃など、学習内容自体に向いてしまったことが挙げられる。これは、授業時数が2時間と限られていたため、加納岩白桃という地域素材について知るための時間が多くなってしまったことが要因として考えられる。地域素材を活用する場合は、時間的な余裕のある単元計画を設計することが必要不可欠となる。

### (2) 学校現場への示唆

最後に、本研究を学校現場で活用する際の留意点を3点述べる。1点目は、地域学習の授業計画を設計する際には、既存の教科書や副読本で扱われている事象のみを取り上げるのではなく、児童に身近な地域の事象を教材化し、取り入れていくことである。その際、地域素材の活用に適した単元であるかどうかを十分に吟味する必要がある。

2点目は、教師自身が各学校の置かれている地域の実態把握を通して、地域に対する理解を深めていくことである。教師が実際に地域へと

足を運び、地域素材の選定と教材化を実施することで、児童の地域に対する興味関心を引き出すことが可能になると考える。

3点目は、地域の人材を積極的に活用した学習計画を設計することである。地域の人々にゲストティーチャーのような形で授業に参加してもらうことにより、児童と地域の人々の繋がりを生むことが可能となる。

## 11. 謝辞

本研究を進めるにあたり、取材及び資料提供にご協力いただいた加納岩果実農業協同組合の皆様、JA フルーツ山梨加納岩支所の皆様、深沢農園の皆様に厚く御礼申し上げます。

## ○ 引用・参考文献等

- ・一安尊正 (2023) 「郷土を愛する心を育む社会科授業の創造：地域素材の教材化を中心にして」『社会と人間』(15) pp.36-42
- ・大石学ほか (2019) 『小学社会3』教育出版
- ・国立教育政策研究所「全国学力・学習状況調査報告書・結果資料」<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/zenkokugakuryoku.html> (最終閲覧：2024/02/15)
- ・松永豊 (2023) 「郷土のよさに気づき、社会に進んでかかわる子どもの育成－地域素材を活用した問題解決的な社会科学習を通して－」『社会と人間』(15) pp.22-28
- ・文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領解説社会編』
- ・山梨市社会科副読本編集委員会 (2022) 『わたしたちの山梨市』山梨市教育委員会